特集 子どもの貧困撃退円卓会議
「あなたの知らない子ども貧困の世界」レポート

7月16日「子どもの貧困撃退♡円卓会議の旗揚げ」の集まりがあり108人が参加しました。これは、とちぎコミュニティ基金（認定NPO法人とちぎボランティアネットワーク）が呼びかけたものです。子どもの貧困に関心を持ち行動する人が増えることは、子どもたちの未来に希望をもたらすと信じています。多くの方に関心を持っていただけることを願って記録を掲載します。

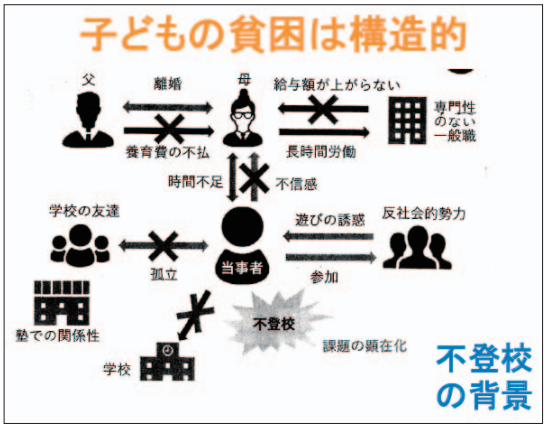
◎書き手●高橋昭彦（ひばりクリニック院長＆NPO）うりずん／宇都宮）

趣旨 子どもの貧困撃退♡円卓会議とは

◎矢野正広（とちぎコミュニティ基金）

◆子どもの貧困は見えない

ひとり親家庭の子どもの貧困率を国際比較したものによると、日本はOECD加盟国で最も貧困率が高いこと、母子家庭の50.8%が貧困であること、3分の2の母子家庭では世帯収入が300万以下であること。しかし、それは「数字」であり、実際をほとんどが知らない。



◆子どもの貧困は構造的

離婚をした父からの養育費の不払い。専門性のない母は給与額が少ない仕事に従事すると、長時間労働をしなければならない。そのことによって子どもにかける時間が不足し、子どもは「愛情を持って育てられていないと思い」不信感がつのる。お金がないので塾もいけず、部活動も断念し、勉強もできず、友達からも孤立する。不登校になり反社会的勢力から遊びの誘惑がくる。不登校だけ取り上げてもその背景には様々な課題と子どもの貧困を生む構造がある。

◆みんなで調べ、考え、お金を集め、行動する。

気付いている人たちがバラバラにやっていては成果につながりにくい。そこで「何がどうなれば子どもの貧困がなくなるか」をみんなで調べて、目標を決めて、行動する。

まず、子どもにとっての大きな課題は、①ご飯が十分に食べられない、②勉強できる環境が不十分、③居場所がない。そこで、対策として食事支援（子ども食堂）、無料学習塾、高校進学支援、居場所づくり（困窮家庭の支援拠点）、就職支援、婚活支援…を行う。食事支援や居場所づくりは「応急処置」にあたり、学習支援は将来のための「予防」になる、就職支援や婚活支援は「根本治療」に相当する。

実際に、1か所の拠点をつくるのに年間1500万円ほどの資金が必要となる。それをどのようにしてかき集めるのか、ファンドレイジングをどう行うのか、調べて、情報共有と情報発信を行い、資金集めを行ってアクションをしていくのである。

とちぎの子どもたちの貧困状態を撃退しようという壮大なプロジェクトである。なお、今回のモデルはすでに山口県ではじまっている「こども明日花プロジェクト」https://www.facebook.com/kodomoasuhana/　である。

REPORT 1 ◆生活保護・母子家庭で育った大学生の話

国立大学生の内田さんから、実体験に基づいたお話があった。

内田さんは、母と二人暮らしで母親は精神障害があった。父から母への暴力がエスカレートし、母が自殺未遂しようとした。内田さんは、母が飛び降りるのを止めた。

やがて母の実家へ移り暮らすようになった。一度父がむかえに来たことがあったが、話し合いの末、父は帰っていきやがて離婚。母の実家でも安定した暮らしは長くつづかず、アル中の叔父が攻撃してきたので、「ここでは暮らせない」と母と飛び出した。次の居場所を市役所で相談したが、全く相手にしてもらえずマクドナルドで幾晩か夜明かしした。母が体調を崩して病院へ受診、みかねた病院から市役所に連絡が行き、すると市が態度変えて施設を用意してくれた。小学3年で母と施設暮らしを経て、やがてS市で生活保護受けて暮らすようになる。中学でいじめに合い、一時不登校になったり反抗期になったりしたが、高校に入り勉強も頑張った。忙しくなって　母との会話も少なくなった。

あるとき、母が骨折してからは家事もやるようになった。幸い、国立大学に推薦入学で合格することが

できた。推薦というのは、他に受験することがないので、落ちたらあとがなかったが受かってよかった。

しかし、入学時に困った。お金がないのである。貯金は3万円しかなく、奨学金をもらうことは決定していても、初回振込まで耐えなければならない。困って社会福祉協議会に相談したが「賄いでつないでくれ」と言われて、どうしたらいいのかわからなくなった。そんなとき、心の支えになったのが、学習支援をしてくれていた人たちであり、パートナーであった。人のおかげで今がある。

大学に申請していた全額学費免除が昨日ようやく通り（ここで会場から拍手）、大学生活を送ることができている。

今は、もともと住んでいたところで世話になった学習支援施設にボランティアとして通いつつ、母の所にも通う。母は精神疾患があり自炊ができずお金も足りない。でも「居場所だった学習支援教室」から立場が変わり、自分のことを聞いてくれる人がいなくなった。

みんな皮一枚でつながっている。

伝えたいこと。

やる気があり、元気な人もいるが、みんな皮一枚でつながっている。頼る人が身内にいない。（自分の場合は）母の面倒も見ないといけない。

大学に行けないのは今の時代、とても不利。奨学金を借りると「生活費があるから」と制度から外される。私立大だとさらに大変なのに…。でも、一方で助けてくれる人はたくさんいることを知ってほしい。

REPORT 2

◆学校の現場から

元学校の教員だった大久保さんから話があった。栃木県教職員協議会のアンケートで、昨年度小中学校に勤務する教師1517人から回答。各クラスに貧困子ども1人以上いる46%。中学校ではさらにこの比率は上がり65%。部活や旅行積立てがあり貧困家庭と分かるようになる。

死ぬまで守秘義務あるのでと、A君、B君と呼びながら話してくださった。

朝、ご飯を食べていない。主食は給食。

小学校6年男の子A君。いつも着るものが同じで着替えていないのに気付いた。保健師の先生に聞いた。「虫歯多いが、治療していないし、腕や首すじに湿疹がある」。病院にかかっていない医療的貧困の状態だった。保健室の先生は、保健室にあるシャワーを浴びせて洗濯で乾かした。アンテナがありベテランの保健室の先生だからできた裏ワザだった。

A君は、朝ごはんは食べていない。給食は噛まずにがつがつ食べて必ずお代わりする。父親は夜勤の仕事で夕食はカップ麺が多かった。家庭科の教材費、給食費などが滞納されていた。栄養のほとんどのカロリーは給食で賄うしかなかった。

父親は正規社員ではなかった。きょうだいは男3人　長男は仕事を転々として定職がなく、次男はバイクを乗り回していた。母は東南アジアから来たが、数年前に若い男ができて自国へ帰ってしまった。しかし離婚していないので「ひとり親家庭」にならない。担任から支払いの電話をしてものれんに腕押し。

学校から民生委員へ連絡。この家庭は近所付き合いをしていない。民生委員がおにぎりを握ってくれて毎朝保健室に届けてくれた。

しかし限界あった。なすすべなかった。卒業して行ったあと、どうなったかわからない。

修学旅行いかない。積立できない。部活もやめた。

中学3年のB君。上に2人の兄、下に妹がいた。B君のクラスでは、修学旅行の準備で盛り上がっていたが、その子は行かないと決めていた。運動会や遠足はいくのだが、修学旅行は旅行積立を10何万円もしなくてはならなかった。親にも担任にも本心語らなかった。実は2人の兄も修学旅行に行かなかった。

担任は、積立するよう働きかけた。市には就学援助という制度があるが「地元の商売に触るから」と利用せず。母もパートしていたが生活費に回り、とても積立できない。B君の妹も部活に入っていたが、遠征費に何万円かかるので退部してしまった。

学校では何もできなかった。その後、どうなったのかわからない。

教師の多忙・自己責任論・相談支援つなぎ方知らない・閉鎖的空気

学校にはこの問題に関わる余裕がない。その理由を

振り返ってみると

①学校は学力向上、行事、生徒指導に追われて教師は　多忙。

②多くの教師には「親が、家庭が悪い」という自己責　任論がある。

③先生は、相談支援にどう繋げばいいかわからない。時間が過ぎていくだけ（今はスクールソーシャルワーカーいる）

④できるだけ個人の情報は漏らすなという閉鎖的な空気も関係している。

REPORT 3

困窮家庭支援の現場から

NPO 法人だいじょうぶ　畠山由美さん

だいじょうぶは、日光市と官民協働でこの問題に取り組んでいる。日光市家庭児童相談室に入った虐待の相談を受ける側であり、実際に相談を受けると、実は家庭背景に貧困があることが多い。

日勤、夜勤かけもちの母親が子育てをしている。**「出産のたびに貧困に陥る家庭」**がある。実は出産時にでる 42 万円だけでは足りない。中には、**特定妊婦**と言って、児童福祉法に基づいた養育上の公的支援を妊娠中から要するような環境にある妊婦がいる。「望まない妊娠」で**妊婦健診に行かず**、子供全員が**「飛び込み出産」**という妊婦もいる。

預けないと働けないが、就労証明ないと入れない。

このような家庭の子どもが保育園に入るのはハードルが高い。預けないと働けないが、就労証明がないと保育園に入れない。

「慣らし保育」は、途中で熱をだすとまた短時間からの開始になる。1 － 2 時間で帰ってくる慣らし保育で働くのは事実上難しい。頼れる実家や親族ないと難しい。そこを「だいじょうぶ」は支えている。

保育園の呼び出し多く、昼間働けない。結果、子どもに目と手をかけられない。

「ひだまり」という**居場所に 31 人**子どもたちが来ています。うち**母子家庭 16、父子家庭 3。生活困窮家庭 29、生活保護 7** です。病気や障害など事情がある。**乳幼児の託児 9 人　うち生活保護 2、　生活困窮 7、母子家庭 5。**

子どもの父親がわからない家庭もあります。昼間は保育園から呼び出しが多くて働けず単価も低い。そこで収入の多い夜の勤めをするが、子どもに目と手をかけられない。

REPORT 4

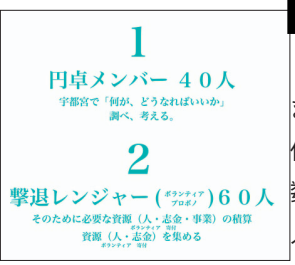
貧困の影響

とちぎユースアフターケア事業協同組合　鈴木知之さん

児童養護施設などから出て行った子どもたちのその後のケアをしている。

虐待相談 25 年で 93 倍、施設人数は同じ。増えた大半は在宅 = 親がいる子

平成 2 年（1990）から児童虐待相談件数の統計が始まった。1990 年：1, 107 件、2015 年：103, 260 件。相談件数は 93. 3 倍になっている。しかし、社会的養護児童数（児童養護施設・乳児院・里親）は 35, 000 ～ 37, 000 人とほとんど増えていない。



つまり、大半の子どもは親がいる家庭（在宅）にいる。そこをどう支援するのか。ベースに貧困がある。

貧困はゆとりを奪う。「待てない」⇒他人とコミュニケーションがとれない⇒⇒痛みに鈍感・学力伸びず

困窮家庭の様子を見ていると、決して邪険にしているわけでなく暮らしているのだが、**子どもが愛されているというメッセージが足りない。**そのためには養育者（父母）には「ゆとり」が必要だが、**貧困はゆとりを奪う。**

夢や希望は「待つ」ことによって生まれるが、余裕のないくらしだと「待てない」。明日の百円を待つより、今日の十円を使ってしまう。

そういう環境で育つ子どもたちは、人とコミュニケーション取れない。空気が読めず、相手の痛みに鈍感、学力も伸びて行かない。子どもの貧困は衣食住の問題だけでなく、「こころの貧困」である。

居場所は県内 7 か所。足りない

昨日、星の家（青少年の自立を支える会）の設立 20 年の集まりがあった。星の家 20 年の活動の中で、親に替わる子どもを支える仕組みとして「月の家」ができた。ごく普通の人たちが子どもたちを受け入れる、その日常の中で子どもたちも変わっていく。

栃木県内に居場所は現在 7 か所。居場所は、送迎付き、ご飯付き、お風呂付き、学習塾である。もっと居場所が増えないといけない。